

山村暮鳥の散歩道

推奨コース:

幕末と明治の博物館を出発

1km・15分 ~ 「老漁夫の詩」の詩碑

600m・12分 ~ 大洗磯前神社裏手の森の散策

600m・10分 ~ 「ある時」の詩碑、子の日が原の碑

900m・12分 ~ 博物館にもどる

(全行程 約3.2km 徒歩1時間程度)

大洗ゴルフ倶楽部
こどもの城
山村暮鳥「ある時」の詩碑

子の日が原の碑は直接道路に面しているため車に注意

子の日が原の碑

山口楼

この一帯は松林です

磯節発祥の地の碑

大洗町観光情報センター

見晴らし台

茨城百景の碑
(大洗と磯濱海水浴場)

健脚の方はこちらから神社の階段を昇るのもいいかも

磯料理山水

ボードレールの碑

大洗美術館

神磯の鳥居

魚来庵

里海邸金波楼

小林楼

大洗シーサイドホテル

急な坂道を避けたい方はこのままホテル街を通り海を眺めながら子の日が原の碑までゆるい上り坂

神社裏の静かな森の雰囲気を楽しめます(但し砂利道です)

坂道の上下り方を避けたい方にはこれが近道

上の駐車場まで急な上り坂ですガルパン戦車が下っていました

住宅街の中の狭い坂道の路地です

この辺りから南側は急な坂道となっています

- ・信号のない横断歩道もありますので、車には十分注意してください。
- ・近隣住民の迷惑になるような事はやめましょう。
- ・ゴミ等を散らかさないようにしましょう。

0 100m

● 茨交バス停 ● 海遊号バス停

(地図の内容は2016年1月現在の情報です)

『梢の巢にて』(大10・五)より

ある時

こんな海が荒れてゐるので
どうして魚がとれるもんか
魚なんど釣るどころか
ぶじだつたのがめつけもんだ
それでも海はかへりがけに
晩はこれで一ぱい飲めと
鱈(かれい)一枚くれてよこした

断章二〇

畦道(あぜみち)でばつたりあつた
よぼよぼのとしよりの
これは涎(よだれ)のやうなたちばなしの
そのわかれの言葉だ
「一日も余計に生きつせえよ」

『雲』(大14・一)より

雲

丘の上で
としよりと
こどもと
うつとりと雲を
ながめてゐる

おなじく

おうい雲よ
ゆうゆうと
馬鹿にのんきそうぢやないか
どこまでゆくんだ
ずっと磐城平の方までゆくんか

ある時

雲もまた自分のようだ
自分のように
すつかり途方にくれてゐるのだ
あまりにあまりにひるすぎる
涯(はて)のない蒼空(あそぞら)なので
おう老子よ
こんなときだ
にこにことして
ひよつこりとでてきませんか

こども

篠竹一本つつたてて
こどもが
家のまはりを
駆けまはつてゐる
ゆふやけだ
ゆふやけだ
ゆふやけだ

病床の詩

ああ、もつたいなし
かうして生きることの
松風よ
まひるの月よ

まつぼつくり

山のおみやげ
まつぼつくり
ぼつくり
こころ
こころげだせ

お昼餉(ひる)だよ
鉄瓶(てっぴん)の下さたきつける

ふるさと

涼々(そうそう)と
天の川がながれてゐる
すつかり秋だ
とほく
とほく
豆粒(まめつぶ)のようなふるさとだのう

ある時

自分はきいた
朝霧の中で
森のからすの
なきかはしてゐたのを

とんぼ

一ばんごう
自分は小さな蜻蛉(とんぼ)であつた
そしてとるとるゆめをみてゐたのは
どこかの丘の
穂(ほ)にでてゆれてる

芒(すすき)であつた

ある時

妻よ
こんな朝である
海を
掌(てのひら)にのせてみるのは

妻よ

どうだらう
あんなに沢山の小舟が
颯(もや)にかくれてでてゐたんだ
まあ、みてるて御覧
一つ私が吹飛ばしてみせるから



山村暮鳥(詩人・童謡童話作家)

【プロフィール】

明治十七(一八八四)年一月、群馬県西群馬郡棟高(むなだか)村(現在の高崎市)の農民の子に生まれる。本名、木暮八十九(はつくくじゅう)。長命を願う名前。旧姓は志村。前橋の教会の夜学に通い後に受洗。聖三一(せいさんいち) 神学校に学んでキリスト教の伝道師となった。秋田・仙台・水戸・常陸太田・磐城平(いわきたいら)・再び水戸と、各地の教会に赴任し伝道活動をしながら詩作を続けた。

大正十三(一九二四)年十二月大洗町磯浜町でその生涯を閉じた。享年四十歳。墓所は水戸祇園寺(ぎおんじ)の管理する江林寺墓地(こうりんじぼち)にある。

【作品と作風】

詩集として、「最も極端な象徴詩」「未来詩」と呼ばれる『聖三稜玻璃(せいさんりょうはり)』、「人道主義的な風は草木にささやいた」、家庭を創作の拠点とした『梢の巢にて』、東洋と西洋の詩心を買くものが重心であることを見抜いた短詩集『雲』などを発表した。

評論集に『小さな穀倉より』、小説に『十字架』、童話に『ちるちる・みちる』、『鉄の靴』、評伝に『葦舟の兒(あしぶねのこども)』、『聖フランシス』などがある。

【大洗の詩碑】

「ある時」の詩碑——萩原朔太郎撰、小川芋銭書。暮鳥没後をはじめ建られた詩碑。昭和二(一九二七)年五月一日に除幕。当初は子の日が原(ねのひがはら)に建てられたが、そこがゴルフ場になったため、昭和二八(一九五三)年に県立大洗公園内に移設された。

「老漁夫の詩」の詩碑——暮鳥が永眠するまでの約五十年間を過ごした磯浜明神町の鬼坊裏(おにぼうら)別荘の跡地に、平成一九(二〇〇七)年十一月十七日に暮鳥会の加藤宗一氏によって建立された。